

書 評

戸田美佳子. 『越境する障害者—アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌』明石書店, 2015年, 224 p.

中村沙絵*

「地域でふつうに暮らせる社会へ」という障害者自立運動の理念は、私たちの社会にあっては永遠の課題であるように見える。一方で、本書に登場するアフリカ熱帯林に暮らす障害者たちは、「地域でふつうに暮らしているようにも見える。これをどう考えるべきだろうか。本書に描かれているのは、私たちが目指すべき社会の姿（私たちの未来）なのだろうか。あるいは伝統的な相互扶助が残る「前近代社会」（私たちの過去）なのだろうか。著者はきっと、そのどちらをもいささか単純すぎる理解だと退けるだろう。「車いすを手に入れるために10年以上の年月を要した」（p. 53）インフォーマントたちの傍で短くない時間を過ごした戸田にとって、安易な理想化が現実を見えにくくしてしまうことは、誰よりも痛感するところであったはずである。

本書は、アフリカの障害者の現在を活写する作品であり、それを決して理想化するものではない。ただ、調査地で遭遇した現実を仔細に記述することで、私たちのものの見方を省察することが本書のひとつのねらいであることは確かである。それは、本書の問題設定

にもうかがえる。戸田は、障害者運動とそれに端を発する障害学の功績、すなわち「障害 [を] 個人的・身体的な悲劇（インペアメント）とみる見方から、社会的構築物（ディスアビリティ）とみる見方へ [の] 転換」（p. 21）を評価しながらも、日本での障害やケアをめぐる議論につきまとう、ある種の「息苦しさ」の存在を指摘する。この息苦しさの根源には、たとえば「差別しまいとする差別」というかたちで、障害者を「カテゴリー化」することから逃れられないような私たちの認識・態度があるという。本書の目的は、アフリカにおいて指摘されてきた「隠された障害者」像や「ケアしないアフリカ」のイメージを覆すと同時に、こうした『カテゴリー化に抗する』方向性を見出す」（p. 26）ことにあるのだ。

そこで本書が着目するのが「生業とケア」である。これは、日本をはじめとする後期近代社会での研究のように、「ケア」（それがどう定義されるものであれ）がなされるべき空間や役割関係が前もって設定され、そこでの相互行為が分析対象となるのとは異なる。戸田の調査地において障害をもつ・もたないにかかわらず展開している活動とは、環境から資源を得て暮らしを成り立たせる営み、すなわち生業である。著者は、生業の維持を基礎づけるような具体的で観察可能な相互行為を「ケア」と定義することで、障害者たちの生活や、彼／彼女らが形成する関係性を包括的に描き出す。その描出は、以下の順を追ってなされる。

まず第1章では、「ピグミー」系採集狩猟

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

民であるバカと、焼畑農耕を営む複数の農耕民が居住する調査地の概況が述べられる。カメルーン東部州に位置する調査地は、首都から車で2〜3日はかかる奥地である。だが、19世紀後半以降の西欧列強による支配、定住化政策、現金経済の浸透といった歴史的経緯のなかで、バカの人々は遊動生活から定住化への途を辿り、商品経済が浸透した「ポスト狩猟採集民社会」ともいえる状況を生きている。数千年も前から「アンピバレント」な関係を保ちつつ暮らしてきたというバカと農耕民の関係様式も、極めて現代的なものとなっている。これをふまえ、本書の主なインフォーマントの4人の家族背景やひととなりを紹介される。

第2章では、調査地における障害のフォーカモデルと、西欧的障害観の移入について述べられる。調査地では、障害は治療の対象とされないか、なったとしても他の病気と同様に（呪術師／医師による）治療対象とみなされるなど特別な扱いを受けていない。身体的機能的障害を指す現地の言葉はあるものの、それは障害をもつ人を総称する語としては定着していない。むしろこの事態も変わりつつある。キリスト教の布教活動にともなう慈善活動は「障害者（les personnes handicapées）」という枠組みをもたらしたし、現代の政府による介入によっても障害の特別視という状況は浮上しつつある。それでも、調査地における障害観はいぜんとして、障害を「特別な対処が必要な状態」というよりは「差異」として認識するものであり、人々の関心はそうした差異をふまえて「ここ（村）で共存するこ

との方法を探」ることにある、と戸田は述べる。

この「共存することの方法」は、第3章「障害者と家族一居住形態と婚姻関係」でまず具体的に示される。もともと農耕民とバカのあいだには婚姻の忌避がみられ、障害者もその規則に従うのだが、障害をもつ人々、特に障害者の女性の既婚率が低いことは、身体的障害が婚姻に際して何らかの障壁であることを示唆している。ただし、これは彼女たちが孤立することを意味しない。多くの障害者女性が、未婚であっても養子をもらうなどして「母」となり、父系制でまとまる居住集団のなかに身をおいて生活するからである。この集団は自らがその一員として生業に関わったり、日常生活で手助けを得たりする最も身近な場でもある。ただ留意すべきは、ここで「家族」とは、先行研究でいわれてきたように、障害者のケアを生涯担う唯一の担い手として固定化されてはいないという点である。

家族内部で世話をめぐる緊張が生じないのはなぜだろうか。第4章では、生計活動や日常生活における手助けを「誰」から、またどのように得ているかを検討しながら、この問いに答えている。ここで明らかになるのは、①労働が規格化・標準化されていない文脈では、身体的障害は障壁とは認識されづらく、むしろ「農耕民／バカ（雇用する側／される側）」「女／男（自給作物栽培／換金作物栽培）」といった属性が労働の選択に影響すること、②こうした既存の社会・経済関係に組み込まれながらも、集団間を「越境」することによって、多くの障害者は生計を立てて

いること、そして③日常生活における手助けも、生業が営まれる空間（それは同時に、遊びや学びの場でもある）のなかで、世帯構成員に限らない人々の関与のもと成立していること、である。

結論では、カメルーン農村の障害者の社会性とは何かが示される。生業活動において、障害の程度に応じて自分にできることを任せられる成人期の障害者は、当該社会において明確に境界づけられる「狩猟採集民」／「農耕民」の一員として（そのなかの「女性（母親）」／「男性（長老，家長）」として）ふるまうことで、「一人前」な存在として他者に対峙する（共同性）。ただ、彼らが生計を維持するためには他者からの手助けを要し、その対価となる資源を獲得する必要もある。そこで、集団間を越境することが重要な戦略となる。このとき顕在化するのは、局所的な対面交渉の場面のなかで他者を理解し、関係を紡ごうとする姿勢・能力である（対等性）。このように、調査地における障害者の社会性とは、集団範疇に付随する役割規程から完全に逸脱することなく、しかしときにそれを超えて、非対称的な役割関係を「ないもののようにして」（p. 180）対面的な相互行為に取り組む姿勢によって担保されている。この理解にもとづき、最後にさまざまな差異を前提とした共存社会とはいかなるものかについて、著者の見解が述べられる。

障害をもつ人々も、我々と同じように自立した人間として生活を送るためには、何がなされるべきなのか、戸田も指摘するように、障害学においてこの問いは繰り返し議論され

てきたし、そのための制度も、障害者自身が年月をかけて勝ち取ってきたという経緯がある。けれども、ここで忘れがちなのは、障害をもつ者もそうでない者も、普段からさまざまな（しばしば非対称的な）関係性のなかにおかれている、という事実である。私たちは集団のなかである役割を担い、それなりのふるまいを身につけていく。けれども具体的な状況においては、そうした役割に拘束されずに、相手の働きかけに応じて行為を選択することだってできる（ある人が一人前の介助者でありながら、海外からやってきた障害者のすすめでタクシー代をおごってもらうことも（きっと）できたように（p. 152））。障害者と非障害者、農耕民と狩猟採集民などの差異にもとづく「共存」を考える際に私たちが改めて着目すべきなのは、（差異をどうなくすか、ではなく）差異を前提としたときの、この対等性という行動原理なのではないか。そう本書は読者に問いかける。

以上のように、本書の主張は普遍性をもつものであるが、「非西欧社会／西欧社会」という対立構図がこれを見えにくくしている感も否めない。地域社会はひとつの総体としてまとまりをもった完結する実体であり、慈善や福祉や開発はそれに外在する異質な制度である、とするような見方は、それらがすでに現地社会の内部にあって人々の生活を構築している（たとえば、ジュネは施設で幼少期を過ごしている）ことを捉えきれないだろう。また、西洋発のケア概念が思いやりや愛情と過度に結びつけられてきたとの指摘はまさにそのとおりであるが、ケアについての議論が

しばしばその哲学的根拠として引き合いに出すハイデガーの *sorge* は存在論的な概念であって「他者への深い思いやり」(p. 155)を意味するものでなく、この意味において「顕在化」するものでもない。非西欧と西欧(西洋思想)の隔たりを強調しすぎることで、アフリカの他者性が際立っているのではないか。「他者(第三世界)研究」とみなされては、この本の魅力は十分に伝わらない。本書の魅力は、「ふつうの」人々の視線、対面行為というミクロなレベルから従来のもののやり方を省察する際の、地続きの視点を開示するところにあると思うからである。とはいえ、調査地の人々への誠意と、徹底的に経験に根差した思考によって(特にコラム④から続く結論での考察は秀逸である)、本書は魅力的な民族誌となっている。都市部へも調査の範囲を広げている著者が、今後アフリカと我々の関係をより動的に描き出してくれることを期待してやまない。

鈴木佑記。『現代の〈漂海民〉—津波後を生きる海民モーケンの民族誌』めこん、2016年、348p.

和田理寛*

漂海民、家族で船上に暮らし零細な漁業で身を立てながら海を漂う人々。狩猟採集だが主食等は陸地社会に依存し、商品となる海産物を採捕して市場と繋がる。この独特な生活様式は、瀬戸内海や九州から中国南部、東南

アジア島嶼部、インドシナ半島西岸に面するアンダマン海まで広がる。本書が取り上げるモーケン、このうちアンダマン海にて、北はメルギー諸島から南はタイ・マレーシア国境周辺まで、海と島々を移動し生活してきた人々である。まとまったモーケン研究書としては、本邦では宣教師ウアイトの邦訳本[ウアイト1943(1922)]に続く刊行となる(本書の基になった鈴木[2011]を除く)。また、著者自らモーケンと生活を共にし、ナマコ採捕の体験などを通して書かれた質感豊かな民族誌である。

本書を読んで浮かび上がるのは、外部社会の影響を受けやすい漂海民の姿である。英領ビルマ時代のモーケンは家船での移動生活を送りながら、一方でマレー人の海賊から逃れ、他方ではナマコやツバメの巣、夜光貝などを捕まえて華人やマレー人の商人との物々交換に携わってきた。戦後は鉱山労働や真珠母貝の採捕にも従事している(本書第5章)。さらに現在は、漂泊生活をやめ、他地域の漂海民と同様、陸地への定着が進んでいる。そのため、第6~13章は、モーケンがどのような経緯で定住し、いかに外部社会の影響を受け、またそれに対応しているか、という内容が中心である。

ならば今や漂海民ではないではないか。そうした現実との齟齬を考慮して、本書は「海民」という言葉を代わりに用いると主張する(本書第2章)。ただ、評者としては、海民では対象が広すぎる感もあると思う。過去との連続性を意識した漂海民という名称を用いるか、それとも実態に即して漂海民という枠

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

組みを解体するか、これは今後も悩ましい課題であるかも知れない。その葛藤を示すかのように、本書のタイトルには山括弧つきで漂海民の三文字が表れている。

以下、本書の内容を概観しよう。この本は2つの研究の系譜に身を置いており、1つが災害の人類学、もう1つが漂海民研究である。第1章と第2章はそれぞれの先行研究レビューでもある。本書第8章以降は、両系譜が重なり合って、災害後の長期的な影響下に置かれた漂海民社会が描かれていく。ただし、学術的な貢献の大きさでいえば、どちらかという、(漂)海民研究として本書を捉えたほうが適切かも知れない。もちろん、災害や観光をめぐる研究としても本書は魅力的だが、本書「はじめに」でも述べられているように、著者自身の本来の関心もまた特殊な生活様式をもつ漂海民にあったという。

このあと本書では、民族誌の前に3つの章が設けられており、いずれも文献渉猟に基づく優れた内容である。第3章は海域研究の意義やアンダマン海域の特徴、第4章は民族名称を軸とした英語圏とタイ語圏におけるモーケン研究のレビュー、第5章は資料と聞き取りに基づいた定住以前のモーケンの歴史について述べており、どれも当地の海民の概要として有用である。

現地調査の成果は第6章以降であり、タイのスリン諸島を舞台としたモーケンの陸地定着期の過程と実態が詳しく取り上げられている。なお、このスリン諸島はすぐ北方にビルマ領の島を臨む国境地域でもある。さて、タイのモーケンは既に陸地定住へと移行した

とされるが、その経緯はいかなるものだったのか。第6章によれば、定住の導因は1980年代以降におけるタイ領アンダマン海域各地の海洋国立公園化であり、これ以降、国立公園内では自由な木材伐採や漁撈活動が禁止された。さらに同じ頃、錫採掘と真珠養殖業の衰退とともにタイでは観光産業が台頭し、スリン諸島にも1986年から観光客が訪れるようになったため、国立公園事務所での雇用や観光業に従事する者が増えていったという。ただし、第7章で明らかになるように、実際は国立公園の区域内でもモーケンによる小規模の漁撈活動が黙認されており、なかでもナマコ採捕は現金収入のために重要である。また、このナマコ採捕は、これまで海の穏やかな乾季に行なわれてきたのに対し、自然より社会の影響が増したというべきだろうか、現在では国立公園が閉鎖され観光客がいなくなる雨季にのみ黙認されるようになったため、漁撈時期が全く反転するという現象が生じているという。

2004年12月にインド洋津波が起これると、被災地では、その直後の被害に留まらず、長期的な社会の変化もまた経験することになった。第8～13章は、この津波以後におけるスリン諸島のモーケン民族誌であり、なかでも第9章と第10章が秀逸である。第9章は家船や定住後の杭上家屋を通してみえてくるモーケン社会とその変化を描いている。津波後は住居再建の行政支援が行なわれたが、それは当該社会への理解を欠くものであった。2ヵ所の村落は1つに統合され、床は風通しの悪い合板に代わり、モーケンの好む潮間帯

の家屋建築も禁止された。さらには居住者数を無視した同じ大きさの家屋が格子状の配列をなして整然と建ち並ぶことになった。これはモーケンにとって、汀線からみたとき手前と奥に立つ家屋の位置がびたりと重なってはいけないという禁忌に触れた「悪い家屋」であった。しかし、モーケンもただ従ったわけではない。2005年、2007年、2008年における家屋の位置の変化を示した図からは、再建に伴って、モーケン世界では秩序であるバラバラの配置へと徐々に変わっていく様子が一目で見渡せる。効率や整然さを追い求める行政の都合を、伝統があざ笑うかのような象徴的な出来事である。

続く第10章は、調査地におけるナマコ採捕の実態を明らかにしている。当該社会では生息場所の異なる25種類を潜水によって採捕しているが、毎年浅いほうから深いほうへと徐々に採り尽していき、漁に適した潮汐もこれに応じて変化する。ところが近年は枯渇の時期が早まっている。この原因が津波後に民間団体から多くの船が寄付されたことによる船体数の急増である。これを受け、ナマコの個体数を管理する国立公園事務所は採捕禁止の通達を早めるが、モーケンは監視の目の行き届かない時期や場所を上手く利用することで禁止通達後も採捕を続けている。さらに、より深度をかせごうと長い銚を開発したり、仲買人から酸素を送る潜水用具を譲り受けて貸し出しを始めたたりする者が現れている。この章では、ナマコの生態、その保全管理、潮汐のリズム、支援物資の船といった、自然と社会によって織り成されるモーケンの

猟の実態と変化が見事に描き出されている。

詳しくは省くが、続く第11～14章では、決して円滑とはいえない国立公園事務所との関係や、違法な越境活動、それに国籍付与などが取り上げられている。

以上が本書の主な内容である。ところで評者はタイとビルマの平地に住む他の少数民族について調べてきた。この立場から本書の重要性を述べれば、それは端的に陸域研究に対する海への誘いである。もちろん本書第3章が述べるように、陸域と海域の対比を政治空間に由来したものとして批判したうえで、国家と周縁という対比に置き換えることもまた有用であろう。しかし、これは既にある周縁民族や（漂）海民研究のもつ意義と変わらないし、国家の大局的動向を捉えた議論との間に不毛な対立を生み出しかねない。加えて、国家論として統治制度、宗教、文化などを対照するうえでは、東南アジアの大陸部と島嶼部の区分が有効な場合もある。むしろ、モーケン研究は、大陸部にある海域として、両地域の研究の「舟」渡し役となることが期待される。例として、政治単位を外枠とした、本邦のタイ研究を考えてみよう。すると、『タイの事典』[石井1993]になかった「モーケン」の項目が、その後、本書著者の筆で『タイ事典』[日本タイ学会2009]に加わっていることが分かる。本書はタイやビルマの研究者を今後ますます海域や島嶼部へと誘い出し、また海域から陸を見直す契機をもたらすだろう。たとえば、歴史において、零細な漁民が陸地国家の干渉を受けずに華人市場と繋がっていた可能性など興味は尽きない。

一方、漂海民研究の文脈では課題もあろう。たとえば、先駆的な実地調査として有名な野口 [1987] は、かつて家船生活であった長崎の集落について、過去の生業との連続性を踏まえながら、集落内外の社会関係を実に生き活きと描いている。これに対し本書は社会関係や宗教の描写が少ない。婚姻関係、陸地との接点、ナマコ仲買人とは誰かといった点も不明なままである。こうした側面は、近隣の陸地社会との対照や、他地域の(漂)海民との比較のためにも有意義であるに違いない。なお、今後は海域研究者が本書を評し、より専門的な議論へと展開することを強く期待したい。

漂海民研究の先駆けである羽原 [1963] や上述の野口 [1987] では、既にモーケンへの関心が示されていた。しかし、本邦では、その後、東南アジア島嶼部のサマ研究などが盛んとなるものの、モーケン研究については本書著者の登場を待たなければならなかった。その意味で本書はまさに待望の一冊である。さらに近年、本書著者は「水のゾミア」を論じることで、大陸部山地と海域とを比較する可能性も示唆している [鈴木 2016]。本書の対象とする「島モーケン」の人口はわずか2,800人、そのうちタイ国に住まうのはわずか800人程とされ、しかも既に漂海生活を送っていない。しかし、このアンダマン海の小さな(漂)海民は、今後、著者の活躍を通して、瀬戸内海から、スルー海、そして、ビルマの山地民までを繋ぎ合わせる、意外にも大きな役割を果たしてくれそうである。

引用文献

- 石井米雄監修. 1993. 『タイの事典』同朋舎.
 ウアイト, W. G. 1943 (1922). 『漂海民族—マウケン族研究』松田銑訳, 鎌倉書房.
 鈴木佑記. 2011. 『資源化される海—先住民モーケンと特殊海産物をめぐる生態史』上智大学アジア文化研究所.
 ————. 2016. 「水のゾミア試論—東南アジアの海民を事例として」『東南アジア研究』54(1): 117-126.
 日本タイ学会編. 2009. 『タイ事典』めこん.
 野口武徳. 1987. 『漂海民の人類学』弘文堂.
 羽原又吉. 1963. 『漂海民』岩波書店.

椎野若菜・的場澄人編. 『女も男もフィールドへ』(FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ12) 古今書院, 2016年, 226 p.

佐々木綾子*

本書を含む「100万人のフィールドワーカー」全15巻は、「好奇心旺盛なフィールドワーカーたち」が巻ごとのトピックにもとづき、自らの経験をフィールドワークに関心をもつ幅広い層に向け記したシリーズである。

他の巻が「これから調査を始める人」や「災害調査にかかわる人」など、研究者を読者に想定しているのに対し、本書はフィールドワーカーが自分の性(ジェンダー・セクシュアリティ)やライフイベントについてどう迷い、選択し、行動しているのか、ということに焦点をあてた「ロールモデル集」であ

* 京都大学大学院農学研究科

るため、一般の読者であっても多くの共感や示唆を得られるであろう内容になっている。さらに既刊本の中で群を抜いて女性執筆者の数が多く、本書の特徴である。本編12章のうち10章が女性によって執筆され(1編は夫婦の共著)、うち7章は妊娠・出産にまつわる経験が語られており、女性研究者が中心となったメッセージ性の強い巻となっている。

Part1「フィールドワーカーのジェンダー」では、フィールドワーカー自身とフィールドの人びとの性とジェンダー観が、時として相互に強く影響しあい、フィールドワークそのものに大きくかかわりながら、結果として調査者のフィールドでの振舞いや生き方をも形作っていく経過が語られる。

中川(1章)は、フィールドで積極的に女性たちの作業の輪に加わり「定型化された女性像に吸収され振舞う」ことで、村社会から個人として認められるまでに至った過程を描いている。しかし、そうした意識的・無意識的な振舞いは、彼女自身が逃れようとしてきたジェンダー観の体現でもあったのだ。中川は、自己の常識や信念という「スイッチ」を切り替えることが、対象地域に溶け込む・その土地の規範を(納得できなくても一旦)受け入れるための必要な作業であり、その時々「スイッチ」と対峙することで調査者自身も鍛錬されていくと述べている。2章(永塚)では、状況は異なるが、女性フィールドワーカーであるが故の悩みが語られる。永塚のフィールドは氷河であり、プロジェクトによっては10人ほどのメンバーに限られたス

ペースで長期にわたり共同生活を送る場合もある。着替えや洗濯といった住環境から、「数km先まで白い雪原が広がる」氷河の上でのトイレ、「気合でなんとか乗り切る」生理事情等、「氷雪女子」が直面する課題は少なくない。また過酷なフィールドでは、いくら男性研究者と同じ働きをしようと努力しても、身体差による体力・可動範囲の違いは歴然としている。永塚は、無理をしてかえって周囲に迷惑をかけるより、キャパシティの差を受け止めることも必要だと語る。3章(國弘)、4章(新ヶ江)では「性のフィールドワーク」を行なうフィールドワーカーにとって、自身の性や属性が調査の前提条件となる事例を扱っている。國弘はインドにおける調査で、女性でさらに外国人であるという「好条件」を活かし、去勢儀礼を通過し女神の帰依者となった「ヒジュラ」たちの共同体へ入っていくことができた。ゲイ・コミュニティ研究者の新ヶ江は、調査対象が性文化である以上、調査者の性によってアクセスできる範囲は限定的にならざるを得ないと述べており、逆にそれらが合致した場合は、彼らの置かれている社会・文化的文脈を理解しつつ、声なき声を拾ううえでの強みになるとも考えている。

このようにフィールドワーカーの性は、好むと好まざるとにかかわらず、フィールドで関係する人びとの距離を測る中で常に両者の意識の俎上に乗せられている。その困難さに「女だから/男だから」の差はなく、調査者が対峙し続けることで、自らの生き方を考えることにもつながっていくのだ、というこ

とに気づかされる。

Part2では4人の著者が「子連れフィールドワーク」を行なったきっかけや経緯を語っている。子どもの病気や予防策、授乳方法や食生活等についての詳細な情報が盛り込まれており、研究者でなくとも日本ほど育児環境、特に医療体制が整っていない地域に子どもを連れていく保護者に役立つだろう。また、時に捨て鉢にも思える彼女らの奮闘の背景には、「子連れフィールドワーク」への純粋な好奇心もあるが、仕事との兼ね合いや、フィールドから遠のくことへの焦燥感が大きく横たわっていることにも目を向けたい。各エピソードを単なる個人的な体験談として読むのは容易だが、膨大なエネルギーを費やしてでも「連れて行かざるを得ない」女性研究者たちの事情を理解する足掛かりとしても読み込むことができるだろう。

Part3「ライフイベントとフィールドワーカー」では、研究者が自身や家族のライフサイクルの段階によってフィールドとのかかわり方を変化させながらも「フィールドワーカーであり続けること」を模索する姿が描かれる。長年フィールドに出られなかったり、調査スタイルを変える必要に迫られたりしながらも、それでも著者らは「変化した自分とフィールドとの関係」に新たな可能性を感じ、時には夫婦で、家族で、と単位を変えながら、フィールドワークの新しいかたちを切り開いてゆく。こうした個人の努力が結実する背景には、周囲の理解や意識改革、支援制度等の環境整備が不可欠であり、それらはまだ発展の途上であることも指摘されている。

このように本書は、学問に限らず新しい土地へ踏み出す人に向けた「具体的な経験にもとづくロールモデル」であるだけでなく、さまざまな属性のフィールドワーカー同士の「異文化理解」を助長するうえで大きな役割を果たすであろう。本書の著者たちが読者に想定し、エールを送るのは、しかし、女性だけではない。むしろ本書は男性読者の理解・共感を切望していることが、端々にみとれる。それを端的に示すのがコラム1（長堀）だ。指導者・研究者両者のもつ「無意識の思い込み」によって男女の研究者には“育成され方”に違いが生じ、それらが女性研究者のキャリア開発を阻害していると、長堀は指摘する。本書を読み「私も育児と仕事を“両立しよう””と思う女性や、“やっぱり”女性は大変だ””と思う男性は、女性に偏って育児・家事の負荷がかかることを前提として受け入れ、その現状に自ら欲さずとも乗じてしまっていないか。長堀は、まずは「無意識の思い込みを持っている」ことに気づくことが大事だと訴えている。では具体的にどのような支援・環境作りが必要であるのか？それは本編で著者たちの経験が多くを語っている。彼女ら/彼らの経験から実態に即した制度が整備され、増加する女性研究者のキャリア開発への第一歩となることが期待される。

さて、ここまではかなり「前向き」な書評を行ってきたが、最後に評者の個人的な感想を述べたい。

正直にいうと、初読の際、評者は本書を文字どおり途中で投げ出している。理由を述べるために個人的な事情を書くことをお許し願

いたい。評者は現在2児（4歳と1歳）を育児中の大学研究員である。2001年からタイ北部を主なフィールドに、農山村の生業や森林利用について研究を行なっている。ただ、現在の立場は「科研研究員」だが、在宅で行なう研究室ウェブサイトの管理と週1日の非常勤講師で、どうにか研究とのつながりを保っている状態である。待機児童150人を抱える大阪某市では時間給研究員など保育園は門前払い。授業の日は市の運営する託児所を利用している（病児保育は利用資格がなく、子どもが体調を崩したら即休講である）。会社勤めの夫は研究に非常に理解があるが、子どもが「おとうさんにあいたい」と泣くほどの激務のため、調査中の留守番はもちろん、託児所へのお迎えですら「物理的に無理」である。それぞれの両親は遠方住まいで、勤めや持病などの事情からおいそれと呼び出すわけにはいかない。ここ数年の評者は「フィールドワークどころかひとりで外出もできないフィールドワーカー」なのである。

フィールド復帰へのヒントを期待して本書を手にとったが、読み進むにつれてさらに暗澹とした気分になった。妊娠中も積極的にフィールドや国際会議に出かけ、「子どもが歩かないうちに」とばかりに猛然とフィールドに振り返り咲く執筆者たち。そして「子連れフィールドワーク」には夫が同伴したり、そもそも夫が同業者である事例の多さにも鼻白んだ。夫が会社員の事例でも「11日間の有給休暇」を取り家族でフィールドに入っているのではないか。世界が違う！つまり本書は「(夫が同業者か、どうにかすれば長期休暇が

取れる職場で、親や同僚など周囲のサポートを受けることができる) 女も男もフィールドへ」であるわけだ、と思えてしまったのだ。だが、目を背けた一番の理由は、いきいきと語る彼女らに「理由を並べて『研究しない』ことを正当化しているだけなのでは？」と、蓋をしていた問いを正面から突き付けられたからだということも十分に理解していた。

かくして一度は仕舞いこまれた本書であるが書評とあつては避けてもいられず、二人目がやや落ち着いてきたこともあり、少々余裕をもって再読に臨んだ。すると、現金なもので、著者である彼女らこそが停滞することへの一番の理解者であることが、一転して読み取れるようになったのだ。一人目出産からメインフィールド再訪まで実に10年を要した四方(9章)の焦燥と逡巡の記録は、まさに評者のような読者に向けた心強いメッセージであろう。三谷(12章)の、「子持ちの」「女性」研究者にとって一番必要な条件はフィールドワーカーでいたいという「自分の意思」だが、個人の「意思」と周囲(特に男性研究者)の理解や支援の制度といった「環境」とは複雑に絡み合っており切り離せるものではない、という主張には、研究者に限らず仕事を継続する困難さに直面している女性ならば深くうなずくところだろう。椎野(6章)も同様の指摘をしたうえで「物理的、あるいは難しいときには精神的にでも『継続する』のがフィールドワーカーなのだ」といい切るのは、後に続く女性たちへのエールであると同時に、子育て・介護にあたりながら仕事の責任も抱える彼女自身の決意表明ともと

れる。

女性フィールドワーカーは、男性より相対的に多くの役割を担い、それぞれの事情を踏み越えフィールドに立っている。本書は子育てに焦点をあてたが、不妊治療や介護といったライフイベントに臨む研究者も、今後確実に増えるだろう。特に不妊治療は主に女性に多大な身体的・精神的負担がかかるうえに、そもそもゴールがあるのかも見通せず、さらに治療の個人差が大きく、非常にプライベートな内容を含むため周囲の共感を得づらいという事情もある。「続けたかったら続ければいい」「子どもを産んだから（治療中だから・介護だから）しょうがない」という一見「寛容な理解」は、女性研究者の選択肢を増やすための思考を放棄しており、結果として生き残る女性研究者は「なりふり構わぬ個性的な人」という偏ったレッテルから抜け出すことができない。さまざまな立場の「生きやすさ」を具体例から考え、徐々に組織・社会を変えていくためにも、本書から学ぶことは多い。

椎野若菜・的場澄人編。『女も男もフィールドへ』(FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ12) 古今書院, 2016年, 226 p.

木村大治*

本書は「100万人のフィールドワーカーシリーズ」の1冊として刊行されたものである。表題のとおり、フィールドワークにおけ

るジェンダーの問題、とくに女性のライフコースとフィールドワークについての論者がその中心となっているが、そのほかに、セクシュアリティを調査対象とする研究として、インドの「ヒジュラ」と呼ばれる去勢した人々、およびゲイの人々を扱った2編の論考も含まれている。

一読しての感想は、たいへん面白い、しかしたいへん重い本だ、というものであった。女性研究者たちがさまざまな困難に出会うフィールドに突き進んでいく姿は、凡庸なエスノグラフィーよりも鮮やかにジェンダーの問題を活写している。一方、その過程で出会う女性研究者としての苦労については、いくつかの話は私が個人的に知っていることもあり、平常な気持ちで読み進めることが難しい部分もあった。

本書の表題は『男も女もフィールドへ』ではなく、『女もフィールドへ』でもなく、『女も男もフィールドへ』である。まさにこの点に、ジェンダーや排除をめぐる問題の微妙さが集約されているように思われる。本書の著者たちは、女性12人、男性3人と、大きく偏っている。これは無論、さまざまなハンディを背負うことが多い女性にとってのフィールドワークの可能性を考えようという、本書の目的からのことだろう。しかしおそらく『女も男も』という表題は、そこだけに留まっていはいけないという方向性をも示唆しているのである。私自身は、研究とともに育児にも携わってきたという経験をもつが、評者の選択において考慮されただろう、そういった事情の記述も交えつつ、若干の議

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

論を展開してみたい。

私は1994年に結婚したが、入籍はしていない。一緒になるときに妻から夫婦別姓にしたいと言われたのだが、そのとき考えたのは、もし私が「高橋大治」（妻の姓は高橋である）になれと言われたら、それは嫌だなあ、ということだった。私が嫌なのだから、妻も姓を変えるのは嫌だろう。それなら夫婦別姓でいこう、そう考えたのである。結婚したその年に長女が生まれ、1996年長男が生まれた。ふたりとも生まれたときの姓は高橋だったが、ひとは木村にということで、息子の姓を変えることにした（これはたまたま子どもがふたりいたからできたことであって、一般化できる話ではない）。まず認知したあと、家庭裁判所に行くなど、結構ややこしい手続きだったと記憶している。キョウダイで姓が違うことになり、学校の友達に「（親が）離婚したん？」などと聞かれることがあったというが「いやーこれには深い訳があってね」などと答えていたそうである。もちろん子どもたちには別姓にした理由は説明してある。家族でキャンプに行ったとき、それぞれ「我が家の自慢」を発表するというイベントがあったが、娘はそこで「名字がふたつあること」を挙げていた。また、息子だけを木村にしたのは私たちが勝手に決めたことなので、「大人になって変えなければ自分で変えられる」ということも言っている。

私は1994年当時、福井大学に勤務しており、カメルーンの狩猟採集民の調査をしていた。妻は兵庫県にある企業の研究所に勤めていた。長女は妻が福井に来てそこで産んだ

が、私と妻の両親はともに高齢で育児を手伝ってくれることはできなかったの、ふたりだけで育てることにした。出産後、妻は復職し、私は福井と兵庫を行ったり来たりの生活を送ることになった。その後私は京都大学に移り、家族と一緒に暮らすことができるようになったが、1999年まで5年間、フィールドに出ることができなかった。妻ひとり置いて出かけるのは実際上無理だったからである。そういった事情をある先輩の研究者に話したところ、同情してくれつつも「フィールドに出ないと勘が鈍るからな」と言われ、心に暗い影が差したものである。5年ぶりにフィールドに出て帰国したとき、妻と子どもたちはJRの駅まで迎えに来ていた。ロータリーで「父ちゃんが帰ってきた、父ちゃんが帰ってきた」とびよんびよん跳びはねる姿は、今でもはっきりと覚えている。

このように書くと、いかにも大変なことをしてきたように思われるかもしれない。しかし私自身は、それはたまたま選んだひとつの生き方であって、さして特別のことをしているつもりもない。また、本書に書かれている話を読んで、「著者たちは立派だけれど、私にはそんなことはできそうもない」という印象をもつ人もいるだろう。しかし、それは本書の意図するところではあるまい。実際、たいへんなのはたしかなのだが、それをある種「特別に」たいへんなことだと見るまなざしを、少しずらしていけないのだろうか。以後、この点を中心に話を進めてみたい。

私たち夫婦は別姓を選択している。私は、夫婦別姓法案が成立すれば入籍してもいいと

ずっと思っていた（妻はまた別の考えのようだが）。しかし周知のように、2015年末、最高裁は夫婦別姓を認めないという民法の規定は合憲であるとの判断を下した。私は憤慨してツイッターに「夫婦別姓で社会が壊れるならアフリカの社会なんかとうに壊れとるわ」と書き込んだ。アフリカに限らず、夫婦別姓は世界的にはマジョリティである。それなのに「社会が壊れる」「家族の一体感がなくなる」といった議論をしているのが、とても馬鹿らしく思えたのである。ただし日本でいま急に、全面的に夫婦別姓を実施したら混乱が生じるだろうこともたしかである。歴史的慣習はそう急に変えられるものではない。しかし、やりたい人たちだけが別姓を選択し、同姓を選択したい人はそうするという「選択的夫婦別姓」にすれば、何の問題もないのである。

なぜ「社会が壊れる」などという乱暴な議論が出てくるのだろうか。もちろん、夫婦同姓、夫婦別姓それぞれに、利点、欠点を挙げるができる。たしかに、別姓だと、先に書いたような不便なこともある。そして同様に、同姓を強要しても姓を変えた方が不利益をこうむることになる。夫婦別姓の社会で家族が壊れないのは、別のさまざまなやり方で一体感を埋め合わせているからに違いない。そのように、多少の不利益は埋め合わせる方法はあるはずなのだ。問題は、夫婦は同姓であるのは「当然だ」「普通だ」という思い込みである。この「普通」という考え方を侮ることはできない。それは他の判断をすべて覆い隠す、強い力をもつからである。実際日本

では、選択的夫婦別姓さえ認めようとしないう「普通」が、国会議員の過半数、さらには最高裁にまで蔓延している。一しかし一方、もし夫婦別姓のみを「普通」としてしまったとしても、事情は変わらないだろう。対立する片方のみを「普通」とすることの無理が再び現れ、状況が裏返しになるだけだからである。

このような状況が、本書のテーマである「差別」「格差」を論じるときにはつねに現れてくる。本書に書かれているのは、主として女性フィールドワーカーのロールモデルである。そこには、つねに「女性がフィールドワーカーになるのは無理だ」という通念の裏返しとしての、「女性はがんばってフィールドワークをやるべきである」「それを普通にすべきである」というメッセージが読み取られる可能性が孕まれている。それがあつた種の強制力をもってしまうというのは、著者たちの本意ではないだろう。本書にはそういった側面が少し強く出すぎているように思う。もう少し『女も男も』の表題のように、男性側からの事例なども取り込んだらよかつたのではないだろうか。

女性が、そして男性も、フィールドワークをおこなうに際してはさまざまな困難が伴う。本書から汲み取るべきは、その困難を小さくする工夫だけではなく、困難ゆえに生じがちな「特別感」を消し、さまざまなフィールドへの行き方、そしてフィールドでの生き方を肯定する道筋なのだろうと思う。